小さなできごとから

松井　とし

その日は、春がすぐそこに感じられるような明るい陽ざしに包まれた冬の朝だった。Y男は、小うさぎのルンルンや小鳥達の大好物の小松菜をビニール袋に入れて「おはようございます。」といつもの朝より元気な声で室へ入って来た。「わあー、小松菜ね、ルンちゃん達喜ぶわ、ありがとう」と迎えて後、しばらくして私が誰にともなく「今日はどなたが小鳥のお世話してくれるのかしら……」問いかけると、健康手帳にシールを貼っていたY男が、顔はこちらへ向けずに、しかし、りんとした声で「ぼくがするよ！」と言った。

年少の後半より、いわゆるお当番として四人のグループで飼育動物の世話をするようにしてきたが、野菜を切ること、小鳥のえさや水の取り替え、かごの大きさに合わせて新聞紙をきちんと折って敷く等、一応の手順、日常的な技能をそれぞれが身につけた段階で、私はきっぱりと当番制をやめていた。卒業生が遊びに来て「わたし、幼稚園の時は、うさぎあ

んまり好きじゃなかった。」とポツンと言ったことがあったし、私自身のことをふり返ってみても幼稚園で生活をするようになって初めて動物や植物を身近かに感じ、今ではこれらの存在をぬきにしては考えられない生活をするようになった人間である。そして私は、動物に近づき、愛することは一人ひとりの幼児の心の問題と時期に任せるべきだと思うようになっていた。「お当番だから……気がすすまないけれど……」では動物達も、子どもも不幸ではないだろうか。

Y男は腕まくりをして小鳥の世話を始めた。ほとんどの幼児は園庭へとび出して行きまわりには誰もいない。私も手伝って小鳥のかごの上の部分をはずし、そっとテラスに置く。九羽の十姉妹はすぐさま下へ降りてきて、コンクリートの上に落ちているゴミやらえさやら砂の粒やらを忙しくついばみ始める。不思議なくらいに、いつも決まって同じように小鳥達はこうしていわば素足の感覚を楽しみ、その喜びを小さな体いっぱいに表わしているように見える。かごの下の部分を水で洗い雑巾でふいて底に新聞紙を敷く、Y男は未だおぼつかない手つきを残しながらもじっくりと取り組んでいる。えさを勢いよく吹いて殻をとばすのが子ども達にはなかなか難しいらしく、テラスの端の土の上には小鳥のえさがいっぱいばらまかれることもしばしばで、お陰ですずめ達の他に、どこからかきじ鳩のご夫婦もそのえさをお目当てにこの街中の幼稚園へ通って来てくれるようになった。Y男もほっぺを大きくふくらませながらえさを吹くが自分の顔にかかったりしてなかなかうまくいかない。かごの上と下を再びジョイントさせ家から持って来た新鮮な小松菜をびんの中に差し、そばにいるうさぎのルンルンにも食べさせ「さあ—、終わった。」とばかりY男は大きく息を吐き腕まくりを下ろした。始めてからたっぷり三十分位の時間が過ぎたであろうか。取り替えたばかりのきれいな水の中に代わりばんこに入っては水浴びする小

鳥達の様子を二人で眺めながら私は、Y男のこの二年間の成長を思った。

Y男は、入園当初より身支度に時間がかかったり、ちょっとしたうっかりやぼんやりも目立っていたが、思わず口元からこぼれ出たようなゆったりとしたひと言のやさしさや、内面の豊かさでY男のまわりにはいつもほのぼのとした温かさが満ちていた。年長の二学期になってそんなY男が変わり始めた。それまでのびのびと楽しんで描いていた絵を避けるようになり「人間が描けない。」と一人涙を流したこともあった。小学校の面接でも何も答えずに母親を悩ませた。Y男にとっては、内なる世界から言葉や認識の世界に一歩足を踏み出した成長の痛みであったのであろうか。しばらく時を経て、やわらかなイメージのY男が友達の不正を許さず、一人泣きながら勇猛果敢に向かっていく姿を見た時、私はこれで大丈夫と思ったものだった。

園庭では、若いN先生と大多数の子ども達が元気いっぱい十字おにに興じている。黙ってその友だちのようすを見ていたY男が足元の花壇に目を移し、「チューリップがこんなになったね。」と言う、「チューリップが咲く頃はYちゃんもう一年生ね、きっときれいに咲くから見に来てね」「うん……」ややあってY男は「お外で遊んで来ます」と言い靴をはきかえに行った。靴をはきかえ眼を上げたちょうどその時、Y男の仲良しI男とT男がスーッとスクーターでのりつけ、「Yちゃん遊んでくれる?」と言った。聞くともなしにふと耳にした言葉であったが、それは「遊ぼう」ではなく確かに「遊んでくれる?」だった。そして、なぜかこのひと言に私はひきつけられ、たまたまこの場面に居合わせたことを感謝せずにはいられなかった。特にリーダーの役割をとるY男ではなく、また、この日は自分ひとりで小鳥の世話をした充実感はあったであろうが、気がついてみると友だちはもう遊びに熱中している。出遅れた感じもまたY男の中にあったと思われる。しばら

く時をかけて、それでも「お外へ行ってきます」と自分から一歩踏み出そうとしたまさにその時、友だちがこういうかかわり方で迎えたのである。その瞬間パッとY男の横顔は明るくなり三人で園庭の隅のジャングルジムの方へ駆け出して行った。そのうしろ姿を見送りつつ私もまた胸の中に温かく幸わせな気持をふくらませていた。その気持を大切にしたかったし、外はN先生に任せて……という判断もあり私はルンルンを抱いてひとり保育室へ戻った。いつの間にかこうして私のまわりにはうさぎだけ……という時間も生まれるようになり、保育者としての私と子ども達のかかわりが変わってきたことを考えていた。

押し出されるように、ほんの数年間の勉強のつもりで出て来た幼稚園の現場で生活を始めて早いものでもうかれこれ十年という時が流れている。五十四年度からは障害を持つ幼児を三名迎え教師二人のティーム・ティーチングを実践してきて、おのずと役割が分化し今日のように小さなでき事から私自身が「人間について」「生きていくことについて」考えさせられることが多くなった。輪の中心にあって体験した高まりとは別の、静かに心を満たされるような感動に導かれる時、これまでに出会って生活を共につくってきた子ども達のこと、見守り励まして下さった方々のことを想う。こうして考えてみると私は、人や自然や動物と出会い「感謝」を知る為に現場に出てきたのだと思わずにはいられない。

急に子ども達のにぎやかな声が近くに感じられると、ほほを真赤に染める子ども達が息をはずませ、口々に「ただいま」と室へ入ってきた。あとから三人で十字おにに加わったというY男も色白なほほを紅潮させ「あー今日はよかった。お仕事もしたし遊んだし。」と大きな声で言ってにっこり白い歯を見せた。

（神奈川・県立横浜幼稚園）